

聖人の悲涙

「詮ずるところ、愚身の信心におきてはかくのごとし。このうえは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからいなりと云々」

聖人の態度

関東からはるばる道を求めて来た、身命いのちがけの人たちに向かつて、真に永劫に生かされる道は念仏より外に存知しない旨を、きつぱりと断言し、もし念仏より外に往生の道をも存知し、法文などをも知っているだろうと思われるならば、それはおおいなる誤りである、もしそうした心得ならば南都北嶺にも由々しい学者たちがおわすから、そこへ行つて往生の要よくく聞かるべきであるとの仰せでありました。

私もは、まずここにすでに常識ではうかがえない聖人の態度にふれました。

聖人はさらに、絶対帰依の宗教的態度をはつきりし、自己内観の真相を地獄一定と決定して、無我の大信を宣言し、一転して、全一自明なる弥陀本願の眞実を高く掲げて、これに参与し乗托せる眞人格をたずねて、釈尊及び七高僧を発見し、ついに自らの信の眞実を立証せられました。

始終にわたつて、我らは聖人の態度が「親鸞におきては」との自信の告白であつて、毫も、「お前らは」という知識ぶつた態度でなかつたことに、異常な感銘を持つて来たのでありますが、今や最後に鮮かなる名刀の切れ味の如き聖人特有の嚴肅なる教誠みおしえにふれるのであります。

生命の道は

何故に聖人は、はるばる関東より、思慕しまつりて、たずね来た同行門侶に対して、一見何らの慈愛のなきがごとく

「詮ずるところ、愚身の信心はかくの如くである。このうえは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、皆の者の勝手である。」と仰せられたのであります。

もし聖人が宗教の眞髓を体得せられた方でなくて、しかも世間的な名利に迷惑せられる人であるならば、必ず諸経の要文などを引き出し、学問的な論理をも弄んで、浄土門の眞実教たることを弁明し、無理にでも同行同侶をその勢力内へ繋ぎとめやうとなされたにちがいありません。

また聖人が教団の権勢を重んぜられる方であるならば、堅い教権をかためて、それをおしつけ統御しようとなされたにちがいありません。

また聖人が道の本質をつきとめて生きられないで、単なる人間的愛情の感傷におわる方であるならば、ここで口やさしく追従ついでをもし、追従をもさせられたことでありましょう。

しかし……

助かるか、助からないかという生命道の分水嶺みずわかれに、何で安価な妥協が許されよう。それがよし、たった一人行かねばならぬ寂しい道であろうとも、

それがよし、多くの親しき者のついて来ない荊の道であろうとも、絶対に妥協によつて成り立たないのが生命道の真相でありました。

もし念仏道に生きない者があるならば、それは真に自己を知らない者であり、人生の実相に覚めない人であり、さらに如来の智慧を明らかに体解しない者である。けれども、それだからといって、それらの人たちに、本質的な求道と自覚のない限り、人間の一時的な化粧や真似事で解決され、始末される問題ではなかつたのである。

真愛

『大無量寿経』において、大聖釈尊は、

「宜しく各勤精進し、努力して自ら之を求むべし。必ず超絶し去りて安養国に往生することを得ば、横に五悪趣を載り、悪趣自然に閉づ、道に昇ること窮極無し。往き易くして人なし。その国逆違せず、自然の牽く所なり、何ぞ世事をすて、勤行して求めざる。極長生を得て、寿樂極りあること無かるべし。然るに世人薄俗にして共に不急の事をあらそふ。」

とお説きになりました。「往きやすくして人なし」と教えたもう大悲を感佩せずにはいられませぬ。

更にまた、流通分には

「仏、弥勒に語りたまはく、それ彼の仏の名号を聞くことを得ることありて、歡喜踊躍し乃至一念せん、当に知るべし。此の人大利を得となす。則ち是れ無上の功德を具足するなり。この故に弥勒たとひ大火の三千大千世界に充滿することあれども、2 要ずまきに此を過ぎて、この経法を聞き………」

と切々たる慈愛のこもつたみ教えを垂れていられます。

こうした大聖の慈愛を感じつつ、今、聖人のこの最後のみ言葉を聞きます時、私はどうしても、大悲にぬれた御涙の、胸中一ぱいに、秘められてあることを見ぬわけにはゆきません。

「この上は念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからいなり。」

この突きとばされた聖人のみ心は、安価なる同情ではありません。しかし、真愛のひらめきであります。徹底したる愛語であります。一時的の彌縫びぼうではありません。はつきりとした自信と慈悲のない者にどうしてかかる態度がとれましよう。

盲目的な従順を突きとばし、外面的な教権の化城から開放され、全く自由の野に立って、それぞれが深刻に自己を批判すると共に、如来の本願をつきとめて聞かねばなりません。

生命道は自然法爾であります。生きる人それ自身の体験を通して、独自の世界に往生する外いたし方はありません。関東の人たちは溺るる者が藁でもつかむような態度で聖人につつかり、人間善悪の一切のはからいを打ち切られ、ついに如来の本願にほんとうに更生したことでありましよう。

私どもは、ここにも「教化とは何ぞや」の問題に対して明確なるお答を頂きました。

そして、また、ともすれば人間的な醜いものにつき易い教役者と同行の間に、何がどうあらねばならぬかをもはつきりと知らされました。

教権、征服、妥協、追従、盲愛、賛成………等々の小我的なものを引き破って、如何なる場合にも自由の大信海を徹頭徹尾生きぬきたもう聖人を尊崇せずにはおられませぬ。